藤丸くんと立香さん

こつめ

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ぐだ男×ぐだ子です

藤丸くんと立香さんが人理修復する世界線があってもいいと思わん？

目次

藤丸くんと立香さん ―― 1
藤丸くんと立香さん2 ―― 13
藤丸くんと立香さん3 ―― 23

藤丸くんと立香さん

「ねぇ」
「なに？」
俺はゲーム画面から目を離さずに、後ろでベッドを占拠して漫画を読んでいる彼女に返事をする。当然のように彼女、立香が居座っているが、ここは彼女の部屋ではなく俺，藤丸のマイルームだ。
「なんかあった？」
聞いてくる彼女もきっと、読んでいる漫画から目を離してはいないだろう。
……でも驚いたな、そんな表には出さないようにしていたつもりだったんだけど。やっぱり彼女には隠し事をできそうにない。
「……俺たち、こないだ人理を修復してさ」
「うん」
「ようやく日本とも連絡がとれるようになったじゃん？」
「うん」
「それで、しばらく見れてなかった友達とか……好きだった子、とかの近況を知ったわけ

なんですが」
「……あー、まさか……」
「……いつのまにか、その子が他の男と付き合ってて。なんか、失恋、みたいな」
「……ありゃー……」
「一応俺の中では、まだ彼女のことが好きなつもりだったのに、……失恋を『まぁ当然か』って思っちゃった自分が居て」
「そんで自己嫌悪で死にそうになってるけど、他の皆には言えなくて虚無ってると」
「ご名答です……」
　いかんせん、こういう話はサーヴァントのみんなとは話しにくい。こういう時だけは、同じマスターという立場の立香の存在が有り難い。
　その彼女はしばらく考え込むと、
「……よし、スマブラしよう！」
　などと突飛なことを言い出した。
「なんで!?」
「こーいうのは誰が悪いとかじゃないから、考えるだけ無駄！　何か別のことやってストレス発散するしかないの！　安心して、気が済むまで付き合ってあげるから！」
　……ああ、うん、そうだった。立香のこの明るさがあったから、人理修復の旅を乗り

越えられたんだったな。
「……ＧＣコンは渡さないからな」
「えぇ～ずるい！」
「いいじゃん立香のが上手いんだから」
「私だってＧＣコン使えなかったら藤丸よりは下手なんだけど！」
　そして結局、次の日の朝までスマブラをやっていた。
「「ふわぁ……」」
　俺と立香の欠伸が重なる。今は立香とマシュとのブリーフィングの時間だ。それを見て、マシュがクスッと笑った。
「昨日はお二人で夜更かしなさっていたのですか？」
「まぁね……どっかのピカチュー使いさんがねかせてくれなかったもので……」
「へぇ？　『もう一戦、もう一戦だけ！』って頼み込んできたのはどこのアイク使いさんだっけ？」
「……ふふっ、お２人はとても仲がよろしいんですね。ちょっとだけ、嫉妬しちゃいます」
「「どこが」」
「そういうところですよ、先輩」

……むぅ、どうにも旗色が悪い。
「……あ～、俺そういえばダヴィンチちゃんに呼ばれてるんだった。それじゃ！」
「あ、ちょっと、先輩！」
俺はマシュと立香を残し、ダヴィンチちゃんの工房へと急いだ。
▽
「……ん、元気になってくれたみたいで良かった良かった」
「え、先輩、何かあったんですか？」
「ちょっとだけ、ね。藤丸って、ああ見えて独りで抱え込むところがあるからさ。時々は、こっちから突っついてやらないとね。……まぁ、これは私にも言えることだけど」
「……よく見てるんですね、先輩のこと」
「別にそんな、特別見えてるってワケじゃないよ。気づかないこともいっぱいあるし。……ただ、なんというか、ね？……その、惚れた弱み、みたいな？」
▽
「おや、誰かと思えば藤丸くんじゃないか。何か入り用かい？」
ダヴィンチちゃんに呼ばれているというのは嘘だけど、ダヴィンチちゃんに用があるのは本当だ。そういうわけで、俺はダヴィンチちゃんの工房を訪れたのだった。
「実は、立香に送るプレゼントを探してて」

「ほう、プレゼント」
「まぁ、その、立香にはなんだかんだお世話になりっぱなしだからさ……。たまには、感謝の気持ちを伝えてもいいかな、みたいな?」
　するとダヴィンチちゃんが満面の笑みになった。
「あぁ、そいつは素晴らしい!よろしい、その依頼、この万能の天才レオナルド・ダヴィンチが請け負った!」
　ダヴィンチちゃんが協力してくれるなら心強い。
「ありがとう、ダヴィンチちゃん!　それで、プレゼントの中身なんだけど……」
「ほうほう……なるほど……だったらこれのほうが……」
「ふむふむ……そっかそっか……そしたらこれとかは……」
　そうしてしばらく、2人してプレゼントの中身をああでもない、こうでもないと議論した。
「今日はマジで疲れた……しぬ……座に還っちゃう……」
「はいはいお疲れさま、英霊じゃないんだから土にしか還れないでしょ」
　出撃から帰ってくるなり、立香は俺のベッドに倒れこんで、我が物顔で占拠する。こいつは出撃から帰ってくると大体こうだ。そのくせ、他の人の前では無理して笑ってみせる。それを放っておけないのは多分、自分もそうだからだろう。そして立香もまた、

俺を放っとかないでくれるからだろう。
「そんな立香さんのために、本日はこちらをご用意しました」
だから偶には、こうやって感謝を伝えたっていいだろう。
「……？　これは……？　……ッ、まさか……！」
「そうそのまさか！星５【とても高くてとてもおいしいチョコ】！」
「え、これ限定生産のやつじゃん……どうやってこんなものを……」
「カルデアの売店に送られてきた試供品の余りを偶然もらってね」
もちろん嘘だ。こっそりレイシフトをして集めた資材を基に、ダヴィンチちゃんの不思議な力で再現してもらったのだ。
「ありがとう……え、マジで感謝しかない……」
「はいはい、精々味わって食べてくださいな」
「もちろん！　……えへへ……」
こういう笑顔を見れるのだから、人理修復できてよかったなぁとか、思ったり思わなかったり。

カルデアのマスターとしての業務は、レイシフトだけでなく、それに際する報告書などの作成も含まれている。

今日は久しぶりに出撃任務が無かったので、溜まってた書類仕事をまとめて片付けてしまおう。そう考えてたんだけど……。

「……今更だけど、なんで居るの？」

当然のように俺の部屋に居座り、同じく溜めていたのであろう書類仕事を処理している立香に問いかける。

「自分の部屋だと捗らなくない？　あとわかんないとこあったら藤丸に聞けるし」

俺の問いかけは、（立香の中では）極めて合理的な答えによって処理されてしまった。

……まぁ、俺もわからないところを立香に聞くことはあるから、助かるといえば助かる。

「ハァ……」

立香を追い出すことを諦めた俺は、気合を入れなおすべくコーヒーを淹れてくることにした。

「あ、私の分もお願ーい」

「……誰もコーヒー淹れてくるとは言ってないんだけど」

「え、違うの？」

「……ミルクと砂糖は？」

「藤丸のと一緒でいいよー」

「おっそーい」

給湯室からコーヒーを淹れて戻ってくると、心無い言葉に出迎えられた。
「どうせ猫舌だからすぐには飲めないくせに」
「子供舌の人に言われたくありませーん」
やるかァ？　という空気が一瞬漂うが、
「うそうそ、ありがとね」
立香のふわっとした笑顔で、その空気は無くなってしまった。
「……どういたしまして」
素直に返されると、それはそれで困る。仕方ないので、真面目に書類に取り掛かることにした。
紙のめくれる音、ペンを走らせる音、コーヒーを啜る音。
しばらく、世界がその3つの音だけの時間が流れた。
報告書の内容に頭を悩ませていると、ふと立香が視界に入った。
……時々忘れるけど、顔は良いんだよなーこいつ。今かけてるメガネ（『なんか頭が良くなる気がするから』という理由で立香は時々この伊達メガネをかける）もサマになってるし……。
……ってダメだ、いまはそれよりこの報告書に書く内容を考えないと。邪念をなんとか脳内から追い払い、再び目の前の書類に没頭する。

しばらく集中してがんばったおかげで、なんとかひと段落ついた。
はぁー、とため息を吐きながら視線を上げると、なぜかこちらを見つめていた立香と目が合った。
「なに？」
なんでこっちなんか見てたんだ？　まさか俺の顔に見入ってたとかじゃないだろうし。
「……ッ、なんでもない。……私終わったから帰るねー。コーヒーごちそうさま」
なぜかそさくさと俺の部屋を後にしようとする立香。……心なしか顔が赤い、ような。この部屋は結構空調が効いてたから、その所為か？
「はいはいおやすみ。あったかくして寝ろよー」
「……ん、おやすみ」

レイシフト先の情報というのは、ある程度まではカルデアで観測でき、事前に知ることができる。しかし、カルデアで観測できる情報には限りがある。
そのため、現地での聞き込み調査という手法は、原始的ながら有効な手法である。そして手分けしての聞き込みは、より多くの情報を手に入れる為の手法としてよく用いられる。

現に今回のレイシフトにおいても、その手法が取られた。取られた、のだけど。
「オネーサン、オレと遊ばない？」
「や、予定あるんで……」
「えー、そんなこと言わずにさぁ。ちょっとだけでいいからさぁ！」
「いや、そう言われましても……」
その結果、立香が絵に描いたようなナンパに遭っていた。しかも割りとしつこいタイプのようで、立香も断りあぐねている。
……あいつ、変なとこで外面を気にするからなー。人の頼みを断るの下手なんだよな、アイツ……。まったく世話が焼けるマスターだ。
俺はさっさと立香のもとに近寄ると、彼女の手を引いた。
「行くよ、立香」
あっけに取られるナンパ男を尻目に、立香をつれて人ごみを掻き分けていく。その間、彼女は何も言わなかったし、顔も見えなかった。
しばらく歩くと、人ごみが減ってきた。ここまでくればさっきの男ももう追ってこないだろう。そう思って離そうとした手を彼女が不意に握り消してきて、思わず俺は心臓が止まるかと思った。
「……ねぇ、私たちホントのカップルに見えてたかな？」

「……さぁ」
「……じゃあさ」
手を握る立香の力がぎゅっと強くなった。
「ホントにしちゃおっか」
「え」
それはどういう、と聞こうとした俺の声は、遠くから俺たちを見つけて駆け寄ってきたマシュによって遮られた。
「先輩！」
「マシュ！さがしたよー！」
するりと俺の手から立香が離れていった。残ったのは、彼女の温もりだけ。
「からかわれた……のか？」
敵わないなぁ、と手のひらをぼんやりと眺めながら思った。
……この後の任務、絶対集中できないよなぁ……。
▽
「先輩！　良かったです、無事に合流できて。……あれ、先輩顔赤いですよ？　体調が優れませんか？」
「あーうん大丈夫大丈夫！　だからはやく行こ行こ！　ね！」

「わ、そんなに押さないでくださいっ！」

藤丸くんと立香さん2

「あっはっは、いまの見たー？おっもしろーい」

隣でベッドに腰掛けて座る立香が軽快に笑う。今2人で見ているのは、彼女が一緒に見ようと言って俺の部屋に持ってきた、一昔前のコメディ映画である。……いや、正確には「パニックアクション」として製作された映画なんだけど、出てくるモンスターがいかんせんチープすぎて、コメディと見ざるを得ないのだ。なんだよ狼鯨って……。

しかし今の俺に、それをゲラゲラ笑うだけの余裕はない。何故か？　狼鯨と女医との感動パートに涙したからではない。

近いのだ。隣に座っている立香との距離が、ほぼ無いに等しい。というか、普通にくっついている。

もともと、誰にでも距離感が近いタイプではあったけど、最近は以前にもまして近くなっている気がする。……いや、多分気のせいじゃない。

先日のレイシフト先での一件以降そう感じているのだから、多分そうだ。

このふわっとした空気のままなのは、なんか、嫌だ。

俺は意を決して、口を開いた。

「あの、さ、立香」
「んー？」
「……実は、この前、マシュに立香のこと、聞かれて」
「うん」
『お２人はお付き合いなさってるんですか？』って……」
「へぇ」
　立香が画面を見たまま答える。
「それで、俺……『付き合ってる』って、言っちゃったんだけど」
「あー、そうなんだぁ」
　立香は、変わらずこちらを見もせずに言った。
『そうなんだぁ』？　何それ。ネタとしても笑えないからこの反応ってこと？　俺には立香が、わからない。
「……『そうなんだぁ』って、それだけ？」
「え、他に何か言うことある？」
　思わず、ディスプレイの電源を切る。えーいいところだったのにー、と立香が口を尖らせるが、そんなことはどうでもいい。
「……いいのかよ、それで」

普通に考えてイヤだろ、勝手に付き合ってることにされたら。
「いいよ？　藤丸だし」
あっけらかんと言う立香に、だんだん腹が立ってきた。
立香の肩をつかんで、ベッドに押し倒す。
「じゃあ、こういうことされてもいいワケ？」
一瞬だけ立香は驚いた顔をしたが、すぐに妖艶な笑みを浮かべた。
「それはちょっとだけ違うかな」
立香が腕をこちらに伸ばし、彼女のその細くて綺麗な指が俺の輪郭をなぞる。
「されてもいい、じゃなくて、されたい、だよ」
理性の崩壊する音がした。
半ば強引に、立香の唇を奪う。ただ本能の赴くまま、気なんて遣わない。
「んっ……ん……」
口内に舌を伸ばすと、立香もそれに舌を絡めてきた。互いの全てを味わうように、舌を絡ませる。鼻腔を立香の匂いがくすぐるのがわかる。
「はっ……はっ……」
一旦息を整えるために口を離す。唾液が糸を引いて2人の舌を結んでいた。
「もう……がっつき過ぎだって……」

荒れた立香の息遣いを見て、欲情を抑えられなくなった俺は、再び彼女に唇を重ねる。
「んちゅ……んっ……」
次第にキスだけでは収まらなくなってきて、俺は立香の豊かな胸へと手を伸ばす。本人はあまり頓着していないが、決して小さな部類には入らないだろう。力を加えると自在に形を変化させるその胸は、いつまでも触っていられるような気にさせた。
「んっ……もう、しょうがないなぁ……」
そう言って立香は一度俺から身を離し、服を脱ぎ始めた。上気したその表情や、服の布擦れ音、露わになる肉体。その一挙手一投足から、目が離せなかった。
そして上下とも下着姿になると、立香はこちらに両手を広げた。
「ほら」
俺は飛びつくようにして、再び立香の肉体を貪る。さっきまでと違って下着１枚越しの彼女の胸は、指が吸い込まれるような触り心地だ。我慢できなくなって、俺は彼女のブラと胸の間に指を這わせた。少し動かすと、控えめに自己主張してくる彼女の乳首に辿り着いた。人差し指でコスコスと擦ってやると、さらに自己主張が強くなった。もう摘めないほどだ。
「あっ??……それ、やっ??」
段々と立香の声が甘くなってきた。その反応をもっと見たくて、俺は彼女の硬くなっ

た乳首に舌を這わせた。
「ひゃん??あっ??やっ??」
ブラを外して、立香の右胸を舌で味わいながら、空いたもう片方の乳房を右手で揉みしだく。立香も快感が我慢し切れないようで、いやいやと首を左右に振って、両手で口を抑えようとしているが、それでも嬌声が漏れ出ている。
やがて俺は、立香のショーツへと手を伸ばす。彼女のそこは、既にほんのりと湿り気を帯びていた。
「やっ??そっちは……??」
脚を閉じて抵抗しようとする立香を無視して、ショーツの上から刺激を与えていく。カリカリカリカリ、と擦っているとじんわりと染みが広がってきた。
ここで俺は一気に、彼女のショーツをずり下げて、取り去ってしまった。これで立香は完全な全裸になった。
「うう……??」
流石に若干の羞恥が生まれてきたようだけど、気にせず愛撫を続ける。十分に湿ってきた彼女の膣は、俺の指を受け入れるのに何の抵抗もなかった。
「やっ??あっ??あっ??」
指が動くたびに、クチュクチュといやらしい音が響く。俺は人差し指だけでなく中指

も彼女の膣に挿入した。
「えっ??うそ??待って??それっ??ダメっ??」
彼女の言葉とは裏腹に、愛液の分泌量は更に増加した。指を動かすたびにジュプジュプと音が鳴る。もう俺の右手は全部伝ってきた愛液まみれでビショビショだ。
「やっ??むり??きちゃう??きちゃうからぁ!??」
立香の抵抗を無視しつつ、最後にもう一押し、とばかりに指の腹で擦りながら、動きを激しくする。口では抵抗するそぶりを見せながらも、彼女の腰がどんどん上がってきている。
「なに??これ??しらない??しらないのに??なんかきちゃう??だめ??だめ??やっ??あっ??あ〜〜っっっ????」
ちょろろろ、と愛液が吹き出してきた。更に指を動かしてやると、それに合わせて立香はジョパッ、ジョパッと多量の潮を吹いてしまった。
「はっ??はっ??はっ??……なにこれ??……すご……??」
そんな立香の乱れる姿を見て、俺も我慢し切れなくなった。一気に服を脱ぎ捨てると、限界までいきり勃った肉棒を、立香の濡れそぼった秘部に押し当てる。
少し力を加えただけで、ズプリと奥まで飲み込まれた。
「んっ……??シちゃったね……??」

「くっ……」
　立香の膣内はとても柔らかく、気を抜くとすぐにでも射精してしまいそうだ。俺は立香に断りもせず、必死に腰を振り始めた。
「あんっ??あっ??んっ??」
　動きに合わせて大きく揺れる立香の双丘を揉みしだきながら、何度も何度も腰を打ち付ける。
「はぁ、はぁっ……んんっ?!」
「んぅ??んっ??んんっ??」
　立香が腕を俺に回して、唇を塞いできた。上も下も快楽に包まれて、あっという間に限界に達する。
「んっ??もうイキそうなんだ??いいよ??いっぱい射精してね??」
　俺は立香の腰を掴むと、思いっきり腰を突き出した。
「くっ、射精る……！」
「あっ??あっ??あっーーーっっっ??」
　膣内の1番深いところで、精液を吐き出した。ビュルッ、ビュル、ビュル、と何度も精液が射精されるのがわかった。
「ん、いっぱい射精たね……??」

ゆっくりと肉棒を引き抜く。精液や愛液まみれになったそれを、すぐに立香が咥えた。

「んっ??ん??」

下半身に伝わる快感もさることながら、扱き上げる手つきや、髪をかきあげる仕草も、俺の性欲を刺激した。

「じゅぷっ??んっ??まだ元気だね……??」

そこで一旦立香は肉棒から口を離すと、ドン、とこちらを押してきた。射精したばかりで力が入らず、簡単に押し倒されてしまった。そして立香は俺の上に跨ると、肉棒を掴んで自らの秘部に当てがった。

「じゃあ今度は私が頑張るね……??」

立香がゆっくりと腰を下ろすと、ズプズプッといやらしい音を立てながら、肉棒が包まれていった。

「んっ??んっ??まだかたぁい??」

立香が腰を前後に動かしながら、髪を結んでいたゴムを外した。ふわっと纏められていた髪が広がり、同時に彼女の香りもこちらまで広がってくる。その姿に、俺はたまらなく興奮を覚えた。

「あっ??あ??また大きくなった??」

立香が俺の右手に、左手を恋人繋ぎで重ねる。そして空いたもう片方の手で、俺の乳首を責め始めた。
「んっ?!それっ……」
「あんっ??また大きくなった??やっぱり気持ちいいんだ??」
俺も負けじと、空いていた左手で立香の胸を弄る。
「ひゃ??んっ??もうっ??」
それが立香の対抗心を燃やしてしまったらしい。それまでの前後の動きだけでなく、腰を上下に振り始めた。そのあまりの気持ち良さに、一瞬で俺は限界を迎えた。
「ん??ほら??イッちゃえ??」
2回目と思えない程濃い精液が、立香の膣に絞り取られていく。
「はぁ、はぁ、はぁ……」
もう全ての力を使い果たした気さえする。力尽きた俺の上から、立香がゆっくりと肉棒を引き抜いて、俺の隣に身を寄せてきた。
「もう、出し過ぎだって……」
「……誘ってきたのはそっちだろ」
「手を出してきたのはそっちでしょ」
……これ以上は不毛な言い争いになりそうだ。立香を睨んで尋ねる。

「……いいのかよ」
「さっきも言ったじゃん、藤丸がいいの」
「……俺、優しくないけど」
「私はそうは思ってないからへーき」
「……立香を守れるほど強くないよ」
「藤丸に守られるほど弱くありませーん。……藤丸を守れるほど強くもないけど」
少しだけ、立香の表情が暗くなる。その顔は、嫌だ。見たくない。
立香の手を握る。一瞬、彼女がビクっとしたのがわかった。
「じゃあ、お互い守られないようにしないとな」
立香が小さく微笑んで、ギュっと握り返してくれた。
「……ん、がんばろーね」

藤丸くんと立香さん３

２月１４日。

それは、人斬り岡田以蔵の誕生日にして、世の女性たちにとっての決戦日。

そしてそれは、弊カルデアにおいても例外ではないようで。

「やっぱり戦争なんだなー、今日は……」

いつもより甘い匂いが漂っている気がするカルデア内を駆け回り、会う人会う人にチョコを渡している立香を遠目に見ながら、ぼんやりとそんなことを思った。

『みんなの分手作りするんだー』、って言ってたもんな……」

いくらこの狭いカルデアとは言え、サーヴァントだけでなくスタッフまで含めると、チョコを渡す相手はかなりの人数になる。それを全部手作りで用意して、さらに全員に直接渡そうと言うのだから、その苦労は窺い知れない。

……窺い知れないのだから、思ってない。

立香に手作りチョコを貰える人達が羨ましいとか、思ってない。

……いやいや、手作りって言っても、全部義理（のハズ）だから。本命はちゃんと別にあるから。……多分。

一応、俺は立香と……そういう関係、だし。

「……貰える、よな……？」

笑顔でみんなへとチョコを配る立香を、俺は若干の暗い気持ちで見ていた。

▽

「おー、今年も大量だねー。もういらないかもしれないけど、チョコ持ってきたよー」

そう言って立香が俺の部屋を訪ねて来たのは、日付けが変わる直前になってからだった。

部屋に入ってくると、立香が当然のように俺の隣に座った。

「はい、これ。色んなもの貰ってるだろうから、私からは普通の板チョコをプレゼント」

「おー、ありがとう」

彼女から差し出されたのは、何の飾りもない板チョコだった。

……まぁ、立香らしいと言えば立香らしいか。

例え、秘密のチョコレート工場を見学できる金色のチケットが入っていなくとも、彼女から貰えるなら俺にとっては大当たりだ。

そう思ってチョコを受け取ろうとしたのに、何故か立香がチョコから手を放してくれなかった。

「……、」

「……？　どうかした？」
「……ダメだなぁ、やっぱり」
　すると、彼女は暫く俯いてから、顔を上げて力無い笑顔をこちらに向けた。
「ホントは、普通にチョコを渡して、普通に藤丸に感謝されて、普通に終わるつもりだったのにさ。……藤丸が、みんなからチョコを貰って、みんなに嬉しそうな顔してるの見てたら、なんか……ね」
　立香が泣きそうな顔になりながら続ける。
「頑張って、今日は藤丸と顔合さないように、藤丸のこと視界に入れないようにしてたんだよ？　……でも、……やっぱり、ダメ。……面倒くさい女って思われたくないのに、私だけに笑顔を向けて、私だけを見ていて欲しい。普通じゃなくて、特別にして欲しい。……だから、さ」
　そう言うと、立香はおもむろに持っていたチョコの包装を解いて、パキッとその一欠片を割って口に咥えた。
「とくべつに、して？」
　口付けは、胸焼けしそうな程に甘かった。
　立香の肩を抱いて、貪るように彼女と舌を絡ませる。彼女の唾液とチョコとが相まって、甘さだけが広がっていく。

あっというまにチョコは溶けたが、尚も立香を味わい続ける。唾液が彼女の口から溢れ、太腿へと落ちる。
「んんっ……んっ……」
「ん……は、んんっ……んっ……」
欲望を抑えられなくなって、立香をベッドに押し倒す。
「……後悔しても遅いからな……」
「……いいよ、好きにして……??」
俺の中に僅かに残っていたリミッターも外れた。
さっきまでより更に激しい口付けを交わす。俺を求めるかのように、彼女の両腕が俺に回される。俺もいつもより強く彼女を抱きしめた。
「んっ……んちゅ……ん……」
「んんっ……??ん……??はぁ、はぁ……??んっ……!??」
服の上から乱暴に立香の胸を揉みしだく。手早く彼女の服とブラを脱がせると、既に彼女の乳首はピンと屹立していた。
「ひゃう??やっ??乳首は??やめっ??」
彼女の乳首を重点的に責める。甘噛みすると、その度に彼女の身体がビクッと大きく反応する。その反応が見たくて、両乳房を代わる代わる刺激し続ける。

「やっ??あっ??あ??〜〜〜っ??」
やがて彼女が顔を背けたかと思うと、大きく身体が跳ねた。
「……もしかして、胸だけでイッちゃった?」
そう訊くと、立香がギュッと目を閉じたまま、小さく頷いた。普段からは考えられないくらい可愛い彼女の様子に、俺は興奮を隠せなかった。
彼女のタイツを力づくで破ると、ショーツはとっくに愛液でビショビショになっていた。下着越しでもクッキリとわかる彼女の秘部に舌を這わせる。
「やぁっ!??なにこれぇ??しらない??ビリビリして??だめぇ??」
これまでに感じたことのなかった刺激だったのか、どんどん愛液が溢れてくる。もっと彼女の蜜を味わいたくて、舌をより深くまで押し入れると、彼女がまた絶頂を迎えた。
「だめ??だめ??だめ??ん??ん〜〜〜っっっ??」
立香はさっきイッたばかりなのにまたイッてしまって恥ずかしくなったのか、絶頂した時の声を必死に手で抑えた。それを見て、俺の加虐心が刺激される。
左手で彼女のショーツをずらして押さえたまま、右手の指の平で秘部の入り口を擦り上げる。
「イッた??イッたばっかだからぁ??だめ??きちゃう??きちゃうぅ!??」
立香の腰が浮いたかと思うと、ビチャビチャビチャと音を立てて愛液が噴き出した。

「〜〜〜っ??っ??んっ……??ハッ、ハッ、ハッ……??」

立香はもう肩で息をしている。俺の右手はびっしょりと汚れてしまった。けれど、俺の興奮はまだ収まりそうにない。

濡れそぼった彼女の秘部に、中指を差し込む。じゅぷりっといやらしい音がして、簡単に奥まで飲み込まれた。

「〜〜〜っ??」

立香の身体がまた跳ねる。指を入れられただけで軽くイッてしまったらしい。

俺は気にせず指を動かし始めた。彼女の反応を見ながら、どこが気持ちいいのか探っていく。

「ん?!??ん??んっ??んっ??」

「わ、指２本も簡単に入っちゃった」

中指だけでなく薬指も使って、彼女を愛撫する。小さな突起に触れると、彼女の声が一層甘くなった。

「あ、クリをこうやって刺激されるの好きなんだ？」

「んっ??んっ??んっ??んんっ??ん〜〜〜っっっ?????」

図星だったようで、立香が再びぷしゅっと潮を吹いた。指の動きに合わせてぷしゅっ、ぷしゅっと吹き出した愛液が、シーツの上に水溜りを作った。

「はぁっ……??はぁ……??はぁ……??」

乱れる立香の姿は、ますます俺の興奮を加速させた。ギンギンに勃起した肉棒をズボンから取り出して、彼女の顔の前に持っていく。

「立香、こっちも……」

「んっ……??れろっ……??れろっ……??」

立香の舌が、俺の肉棒を這い回る。依然として俺に愛撫され続けているせいで吐息が熱く、息が肉棒にかかる度に快感が伝わってくる。

「っ、腰浮いてきちゃったね、立香……またイキそうなの？　……っく、立香、それ良いよ……」

「はむっ??じゅぷっ??じゅぷ??」

自らの快感に呼応するように、立香のフェラが激しくなる。彼女が手で肉棒を扱きながら、深く咥えこんで頭を前後させてくる。目の前で快楽に身を任せて乱れる彼女の姿と、下半身から伝わってくるたまらない快感が合わさって、俺はあっと言う間に限界を迎えた。

「くっ……！立香、出すよ……！」

「んっ??んっ??んっ??んん～～っっっ?????」

俺が立香の口内に精液をぶちまけると同時に、彼女もこれまで以上の勢いで潮を吹い

てしまっていた。
「んくっ……??こくん、こくん……??」
彼女が口内に出された精液を、愛おしそうに?み下す。
「んっ……??えへへ……??」
その様子を見て、俺の肉棒は一瞬で臨戦態勢へと戻る。
「立香、壁に手をついてお尻こっちに向けて……」
「あ……??ん……??こんな感じ……???」
立香をベッドから降ろし、いわゆる立ちバックの姿勢を取らせる。肉棒の先を彼女の秘部に押し当てると、瞬く間に根元まで咥え込まれてしまった。そして同時に、立香の身体が小さく跳ね上がった。
「挿れただけでイッちゃったんだ?」
「やぁっ……??やっ??らめ??らめ??うごかないでぇ??」
「わ、立香もうイキっぱなしだね……動くたびにビクビクしてる」
「ふぁぁ??んぁぁ??や??らめ??」
彼女との結合部からポタポタと垂れた愛液が、ベッドの外にも水溜りを作る。必死に彼女が手で口を抑えて、声を押し殺そうとしているが、呂律の回っていない喘ぎ声は、俺に奥を突かれる度に大きくなっていて、ほとんど効果がない。

「や??や??や??らめ??らめ??」
手を伸ばして立香の胸に手を這わせる。手を押し返してくる胸の弾力と、確かに感じる乳首の感触を楽しむ。
あまりの気持ち良さに、腰の動きも加速していく。
「あ??あ??あ??ふじまる??ふじまる??」
「立香、立香……！　射精すぞ……！」
最後にぱんっ！ぱんっ！ぱんっ！と彼女の腰を掴んで思い切り打ち付けると、1番奥で射精した。
「ふぁぁ～～～っっっっ??????でてる??いっぱいでてる……??」
空っぽになるまで、立香の1番奥で精液を吐き出す。役目を果たした肉棒を引き抜くと、愛液と精液が混ざったものが、彼女の秘部からポタポタと溢れ出した。
「はぁ、はぁ、はぁ……ちゃんと特別になったって、わかってくれた？」
体力を使い切ってベッドに倒れ伏しながら、立香に問いを投げかける。
彼女はドサッと俺の隣に身を投げると、俺の目を見て小さくはにかんだ。
「……うん、特別に、愛されてるなぁってわかって、……しあわせ」